

3 リスク感度の向上に関する研究

小倉 有紗

吉田 裕

和田 一成

1 はじめに

私たちが目指している「全員参加型の安全管理」を進めていくためには、一人ひとりの安全考動を促進し、社員一人ひとりがリスクを適切に発見し周囲に共有できることが重要になります。一方で、同じ状況を見ても、その状況にどのようなリスクがあるかを感じとる「リスク感度」には個人差が大きいことも指摘されています。そこでリスク感度の高い係員が、なぜリスクを察知できるか明らかにすることを目的に、駅係員を対象に調査を行いました。

2 調査の概要内容

協力者は10代から50代の駅係員74名でした。混雑した駅構内の様子が描かれたイラスト(図1)を協力者に見せ、気がかりに感じる点を書き出してもらいました。調査は4~7名のグループごとに実施し、図2の流れで行いました。本研究ではリスク感度の指標として協力者が指摘した気がかりの数をを用いることとし、分析を行いました。



図1 調査で用いたイラスト

3 結果

(1) 経験やルールを参照することに対する意識の影響

アンケートでは、普段駅で業務をしているときに、経験やルールを参照することがどのくらい重要だと思うかに関連する質問を設け、その回答を得点化しました。この得点とイラスト課題における気がかりの指摘数との関係を分析したところ、経験やルールを参照することが重要だと感じている協力者ほど、多くの気がかりを発見できる傾向があることが示されました($r=0.231$, $p<.05$)。

(2) 年齢の影響

協力者を30歳未満・30歳以上の2つのグループ

【1】イラスト課題 (10~30分)

- ・ イラストを見て「この駅の駅係員だったら気がかりだと感じることを」報告シートに書き出す
- ・ できるだけ多く書き出す
- ・ 周囲と相談はできない



【2】アンケート (約20分)

(主な質問の内容)

- ・ 年齢、経験年数、職種に関する質問
- ・ 業務や日常生活の経験に関する質問
- ・ 職場に存在するリスクに対する意識(経験やルールの参照がどのくらい重要だと思うか等)に関する質問

図2 調査の流れ

に分けて分析を行いました。分析の結果、年齢の高いグループの方が多くの気がかりを指摘できていました。また、「傘を横向きに持ちながら歩いているので、後ろの人に傘の先が今にもあたりそうになっている」といった将来を予測する必要がある気がかりの指摘数は、年齢による違いがみられませんでした。また、「スーツケースを持った人がエスカレータを待つ列に並んでいるが、この後、エスカレータの上からスーツケースを落として下の人に当たるかもしれない」のように、将来の予測が必要な気がかりについては、年齢の高いグループの方が多く指摘できていました。このことから、年齢の高いグループが多くの気がかりを指摘できるのは、目の前の状況に含まれる物事が結びつき得るリスクについてより多くの知識を持っており、それを参照できているためであると考えられます。

(3) 直接経験と間接経験の影響

アンケートでは、イラスト課題で指摘した気がかりのうち、「自分が実際に経験したこと（直接経験）」、「直接は経験していないが見聞きしたこと（間接経験）」があったかどうかの質問を設けました。その回答とイラスト課題における気がかりの指摘数に分析したところ、図3に示すように、直接経験の数が多い回答者ほど、多くの気がかりが発見できていました。一方、間接経験については気がかり指摘数への影響は見られませんでした。このことから、直接経験は間接経験と比較して、リスク感度に強く影響することが示唆されました。

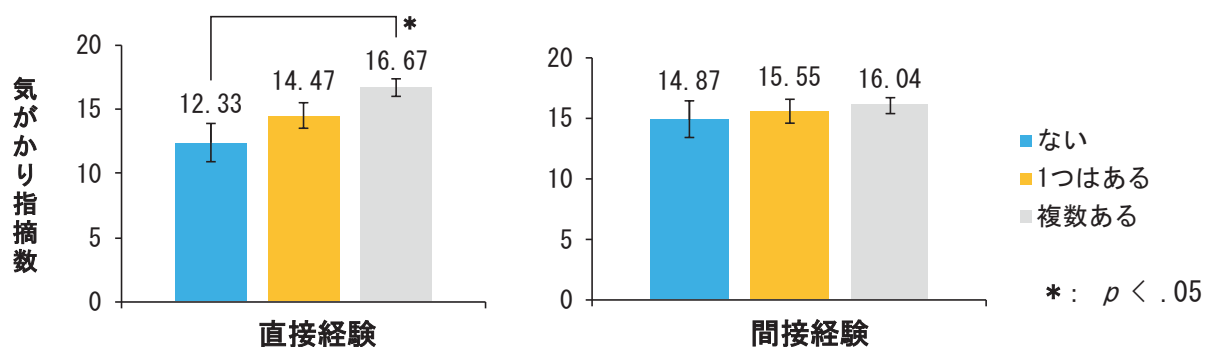


図3 直接・間接経験と気がかり指摘数の関係

4 まとめ

調査の結果、経験やルールを参照することが重要性であると認識している駅係員ほど多くの気がかりを指摘できる傾向がありました。つまり、係員のこうした認識を高めることがリスク感度の向上につながる可能性があります。

また、直接経験はリスク感度を高めるのに対し、間接経験はそうした影響を与えないことが示されました。教育や訓練の場面や、「他山の石」の事例を職場で紹介する場面においては、情報や知識の提供の仕方を工夫し、直接経験に近づけることにより、リスク感度を高められる可能性が示唆されました。